

電柱とあたりが時々見える。寒い風は闇をのせて走つてゐる。

飛び降りたい衝動が自然に乳の上まで湧き上る。

首を窓外へ出して見る。

何にも淋しくもない。

汽車は急速力で走つてゐる。

俺は首をヒツコメた。冷いので窓硝子を閉す。

誰か来るようだ。

俺は先刻驛員らしいのが、聯結臺まで来た時、カーテンの蔭に隠れた。

眞ぐ其處が機關車なのだ。黒煙が渦を巻いて吹き込むので、それに夜だから一寸先が解らない俺は最初知らないで、足を迂らし込む所であつた。

二人の男が俺の腕を掴まへた。

機關車のそばへ連れて行かうとする。

前の角袖と、何時の間にか變つた野郎どもだなと俺は思つた。